

## 井伏鱒二談話・座談目録稿 補遺

——調査現況報告——

前田 貞昭

新版『井伏鱒二全集』（筑摩書房）編集過程において、多くの方々から貴重な資料や情報を提供していただいた。また、筑摩書房編集部（面谷哲郎氏・中澤新吾氏）による調査もあった。それらのほとんどは『井伏鱒二全集』編纂時、特に、別巻二（2000年3月25日）掲載の「著作目録」に生かすことができたが、井伏鱒二の「著作目録」という性格上省略した資料もあり、また、本誌第10号（1999年2月20日）掲載の「井伏鱒二談話・座談目録稿——調査現況報告——」の遺漏の御指摘も、関係資料とともに堀部功夫氏、丸川浩氏の両氏から頂戴した。ここに総ての方々のお名前を記すことはできないが、様々な形で御助力賜った方々の趣意は資料の独占ではなく、その情報の共有にあることと思う。ここに補遺を掲載する所以である。

本補遺の内「参考」に掲げた資料の内、丸川浩氏には『中国新聞』、エアーニッポン株式会社石田あすか氏には『私の青空』、岩崎文人氏には『尊魚』に関して特にお手を煩わせた。また、『週刊新潮』は筑摩書房編集部の調査による。以上に、前田が気づいた遺漏を併せて、ここに編集した。

今後も、遺漏を補いたいと考えている。遺漏・誤脱については、〒673-1494 兵庫県加東郡社町下久米942-1兵庫教育大学言語系教育講座 前田貞昭（E-mail: sadm@soc.hyogo-u.ac.jp）まで、御教示たまわらんことを切に願う。

### 凡例

- (1) 掲出文献は、〔追補〕と〔訂正（再掲）〕とに二分し、〔追補〕には前稿「井伏鱒二談話・座談目録稿——調査現況報告——」に掲出していなかったものを、前稿同様に、

Ⅰ 談話筆記・インタビュー・講演記録など

Ⅱ 対談・座談など

Ⅲ 訪問記事など

の三種に分け、それぞれ年代順に配した。殊にⅠとⅢとの厳密な区分は困難ではあるが、一応、以下のように分けた。Ⅰには、「談」などの表示があり井伏文が単独で掲載されたもの、インタビューなどの一問一答形式や井伏談話を中心に構成されたもの……など、井伏を発話の主体として綴られた体裁のものを置き、Ⅲには、井伏発言が直接に引用されてはいるが従属的性格が強く、記事執

筆者の文章を主体として綴られていると判断したものを置いた。また、井伏発言が直接に引用されていないものや、引用があっても断片的なものは、提供して頂いた資料により、あるいは、瞥見の範囲内で、参考として末尾に掲げた。なお、〔訂正（再掲）〕には、前稿に掲出したものの内、甚だしい誤記・誤植の類を訂正し、また、未確認であった事項を新たに確認したものを、分類せずに発表年代順に掲出した。

- (2) 各記事については、〔初出〕、〔聞き手〕（記事の体裁に応じて〔筆者〕〔筆者〕〔出席者〕などとした）、〔中見出〕、〔編注〕、〔再録〕などの項目に分けて記述した。編者が補った記述は原則として、〔 〕に括った。なお、〔初出〕の項では、月刊誌で「正月号」「新年号」などとある場合は、「1月号」と表示した。発行日に続けて（ ）内に印刷日を示したが、新聞、週刊誌普通号には印刷日を記載する習慣がないので、それらの印刷日についてはその有無を含めて記述しなかった。また、新聞に関しては夕刊のみその旨を記した。
- (3) 新聞掲載分で複数の見出がある場合、該当記事に附された個別の見出を標題として採用し、記事全体に関わる大見出などは〔編注〕に掲げた。新聞のコラムなどの連載記事については、連載欄名を標題の冒頭に配し、その後に個別の見出を配した。初出において固有の標題を持たない場合には、該当記事の掲載された欄名などを〔 〕で括って示した。なお、出席者名のところに附されている、「作家」・「日本画家」などの肩書き、あるいは「司会」・「進行」などの掲載記事における役割を示す字句は、該当者名の後に（ ）で括って示した。
- (4) 再録書についての注記は†の後に記した。初出標題と再録標題が異なる場合は、再録書における標題を再録の項に〔 〕で括って示した。ただし、「対談」「特別対談」などの記事の形態を示す語句が削除された場合は、一々示さなかった。
- (6) 漢字の字体は、現物に従うことを旨としたが、印刷の都合上、現行の字体に改めざるをえなかった箇所が少なくない。

\*\*\*\*\*追補\*\*\*\*\*

#### Ⅰ 談話筆記・インタビュー・講演記録など

##### 弔辞

〔初 出〕1948年6月21日太宰治告別式

〔編 注〕『新潮』第95巻第7号〈特集 太宰治歿後五十年〉（7月号、1998年7月1日）15頁に掲載。

〔再 録〕『井伏鱒二全集』別巻1（筑摩書房、1999年9月25日）〔弔辞〔太宰治葬儀〕〕

##### 読者が一番得——我々は一運托生だ——

〔初 出〕『読売ウイークリー』（読売新聞社）第201号第6面1950年5月6日

〔筆者〕無署名

〔編 注〕談話。「ゾッキ本文化エレジー」の内。「作家 井伏鱒二氏談」の見出がある。『読売ウイークリー』は毎週土曜日発行。

〔再 録〕『井伏鱒二全集』別巻1（筑摩書房、1999年9月25日）

作家生活訪問記 (3) / 井伏鱒二氏

〔初 出〕『文章俱樂部』(文章俱樂部社)第2巻第4号(通巻第8号・6月号)22頁～26頁1950年6月1日(印刷日なし)

〔筆記者〕山川草介

〔編 注〕談話筆記を主要部分とし、それに記者の解説を交えて構成。横書の本文標題下に同じく横書で「病床つれづれ放談／若き日のおもいで」と内容紹介がある。「十一年愛用の赤松造りの机に寄る／井伏鱒二氏」とのキャプション付き写真1枚を掲載。「作家生活訪問記」となっているが、内容からIに配した。目次の欄名は「作家生活訪問」、また、目次副題は「病床<sup>よも</sup>放談」とある。

井伏鱒二

〔初 出〕『風貌』(アルス)1953年3月20日(3月10日)78頁

〔筆記者〕土門拳

〔編 注〕井伏発言のみで構成。撮影日時・場所は「1951年4月22日杉並區清水町24・自宅」とある。扉には「visager: portraits by domon ken」とある。79頁は土門拳による井伏写真。井伏略歴は横書きで次のようにある。「小説家。明治31年(1898年)廣島縣瀬戸内の旧家に生れた。早大佛文科中退。處女作「山椒魚」は大正7年早大豫科2年在學中の作品だったが、長く不遇で、漸く昭和12年頃からペースとユーモアのゆたかさから庶民的な作家として認められ、以來獨特な位置を文壇に占めている。「朽助のいる風景」「屋根上のサワン」「シグレ島敘景」「夜ふけと梅の花」「寒山拾得」「集金旅行」「丹下氏邸」「ジョン萬次郎漂流記」「さざなみ軍記」「多甚古村」「佗助」「當村大字霞ヶ森」など。昭和13年第一回直木賞、25年「本日休診」で讀賣文學賞を受けた。」

〔再 録〕『風貌』(講談社文庫)(講談社、1977年6月8日)†目次裏に「本書は写真集『風貌』(アルス社・昭和二十八年刊)の再録である」こと、原本の登場人物の略歴(土門筆)に編集部が一部修正を加えたものがあること、また、原本の三分の一の分量であることなどが記されている。なお、井伏略歴に関しては、原本のままである。

解説

〔初 出〕『屋根の上のサワン他八編』(角川文庫)(角川書店)196頁～204頁1956年12月5日(1956年12月1日)

〔筆記者〕伊馬春部

〔編 注〕聞き書き。冒頭には以下のようにある。「……彼は毎年、秋になつて口から吐く息が白い蒸氣となつて見える時節になると、私に、松茸やしめぢを送つてくれる。うどん箱に苔を敷いて、凋びた茸類を一ぱいつめこんで、箱の表には必ず「オータム吉日」と記してある慣はしである……／これは井伏さんのごく初期の作品『朽助のいる谷間』の冒頭の一節であるが、十月某日、私が荻窪の井伏家を訪れた日、恰もこの「オータム吉日」が到來してゐた。この文庫本の解説を受け持たせられた私は思ひぞ屈して、各作品の成り立ちなど伺つてみよう、さうすればまた筆も進むだらうと参上したのであつたが、全く有卦に入つたといふべきであつた。即ち以下は、備後路なるその郷土の香り高き松茸を、御馳走になりながらの聞き書きなのである。」本聞き書きでは、収録作の「鯉」「炭鉱地帯病院」「屋根の上のサワン」「休憩時間」「丹下氏邸」「川」「槌ツア」と「九郎治ツアン」は喧嘩して私は用語について煩悶すること「湯島風俗」「お島の存念書」の他、「たま虫を見る」の成立事情にも触れる。本文末尾には「昭和三十一年晩秋」の記載がある。

荻窪村

〔初 出〕『アサヒグラフ』(朝日新聞社)第1869号20頁1960年5月15日

〔筆記者〕無署名

〔編 注〕本文末尾「(談)」。「フォト・ルポ／国電・中央線」の末尾に配す。冒頭第1段落は次のようにある。「私が荻窪に家をもったのは、昭和二年の秋だから、ここに住んでもう三十三

年になる。ここに家が出来るまで、春から秋にかけて、荻窪の平野屋という酒屋の二階にいたのだけれど、結婚することになったら、家内の方で「家を建てた方がいい」というので、ここに家を建てたわけだ。」

#### あの時この人／南方徴用のころ／井伏鱒二さんに聞いた話

〔初 出〕『赤旗』第9002号第16面1975年9月21日

〔聞き手〕沼田卓爾（文芸評論家）

〔中見出〕「徴員の元締め」「輸送船の中で」「〃戦友〃たち」

〔編 注〕聞き書き。「あの時この人」欄。「南方へ徴用された井伏鱒二氏（前列左端）、その右が寺崎浩氏（1942年、シンガポールにて）」とのキャプション付き写真1枚、井伏写真1枚、沼田写真1枚を掲載。標題下に「聞き手 沼田卓爾」とある。

〔再 録〕『井伏鱒二全集』別巻1（筑摩書房、1999年9月25日）

#### 作家、井伏鱒二さんの話

〔初 出〕『毎日新聞』夕刊第39010号第7面1984年11月21日

〔筆記者〕無署名

〔編 注〕談話。「〃手織木綿〃」の文章「無限抱擁」／滝井孝作氏 死去／-90歳-」の内。

〔再 録〕『井伏鱒二全集』別巻1（筑摩書房、1999年9月25日）

#### インタビュー／自選の全集を出した井伏鱒二氏／削除して案な気持ち／名作「山椒魚」

〔初 出〕『山梨日日新聞』第37879号第6面1985年10月10日

〔聞き手〕無署名

〔編 注〕新潮社版自選全集に関するインタビュー。聞き手の地の文に複数の井伏発言を引用。連載中の「軛ノ津日記」、自選全集収録に関わって「山椒魚」、「駅前旅館」、「漂民宇三郎」、「ジョン万次郎漂流記」にも触れる。「自選全集について語る井伏鱒二氏＝東京・荻窪の自宅で」とのキャプション付き写真1枚を掲載。

#### 井伏鱒二氏とのひととき／「花に嵐のたとえもあるぞ」

〔初 出〕『月刊非核自治体通信』（法政大学西田勝研究室）第36号（終刊号）7頁（通号319頁）1988年2月10日（印刷日なし）

〔聞き手〕西田勝

〔編 注〕インタビュー。目次「現物には「主な内容」と表示」標題「インタビュー 井伏鱒二氏とのひととき」。井伏写真1枚を掲載。本文末尾「（昨一二月二一日、杉並区荻窪の井伏氏宅で）。

〔中見出〕「田岡嶺雲の精神」「原発はあぶない」

〔再 録〕『地球の一点から』第55・56号（法政大学西田勝研究室、1993年7月30日）†写真版によって掲載。なお、同号には、西田が発見した『新文化』（1928年4月）掲載井伏訳ポスターの件、『文学的立場』掲載インタビューの件、81年11月の反核文学者声明の件などで井伏宅を訪問したことを回想する、西田勝「井伏鱒二を偲ぶ」を掲載。

## Ⅱ 対談・座談など

#### 南方鼎談會①～終

〔初 出〕『中國新聞』第17722号第3面1943年9月24日、第17724号第3面9月26日、第17726号第3面9月28日、第17729号第3面10月1日、第17730号第3面10月2日、第17731号第3面10月3日

〔出席者〕井伏鱒二氏（元陸軍報道班員）、大木惇夫氏（元陸軍報道班員）、湊邦三氏（大本営海軍報道部文學班）

〔見 出〕「野蠻人といふ觀念」「迷信を理解しよう」「勤勉で可憐な民族」「家長制度がある」「結婚

式と日本兵」〔以上第1回〕「ゲマス激戦夜話」「月明下の大海戦」「戦死といふ心境」〔以上第2回〕「大なるものに生命をさへげる」「静かで激しい戦」「美しく素晴らしい戦」「色光音の交響楽」〔以上第3回〕「身に迫る凄惨な戦」「隊長呼ぶ波間の聲」「詩人と戦争」「バリ島綺譚など」〔以上第4回〕「乳房と毛唐根性」「素晴らしい古代文化」「ジャワの親日熱」〔以上第5回〕「涼しかった昭南」「海の幸のある昭南」「熱帯圏の衛生問題」〔以上第6回〕

〔編 注〕6回連載。各回の大見出し、「嘘だ・野蠻だなんて」「日の角」振って皇軍歓迎」「油の海泳ぐ今村將軍沈み行く船上の心境」「海戦・詩なり繪なり百雷に狂ひ舞ふ色と光」「月明に握る命の綱魚雷の海、野猿の放れ業」「賭博、怠惰たれの罪閻魔泥沼に喘いだバリー」「水清ければ蚊棲ふ」マラリヤ、デング罹らぬ秘訣。最終回を除く各回に出席者の写真各1枚を掲載。

☆座談のスクラップ／今日の文壇——1947夜11月11日夜仙臺にての會合による——

〔初 出〕『東北文壇』(河北新報社)第3巻第1号(1月号)34頁～41頁1948年1月1日(1947年12月25日)

〔出席者〕井伏鱒二、舟橋聖一、丹羽文雄、河上徹太郎、日比野士朗

〔編 注〕本文末尾に「(文責在編集者)」とある。宮崎泰二郎「編集手帳」に「仙臺で文藝講演會をもよおした。その時の來講諸氏の座談をスクラップにしてみた。いわゆる座談會速記でもない新趣向である。」とある。

#### 座談會／「酒杯を語る」

〔初 出〕『茶わん』(寶雲舎)第20巻第4号(6・7月合併号・通巻第215号)34頁～48頁1950年7月1日(印刷日なし)

〔出席者〕中島健蔵氏(文芸評論家)、井伏鱒二氏(文芸作家)、龜井勝一郎氏(文芸評論家)、青柳瑞穂氏(詩人)、加藤唐九郎氏(陶芸作家)、安田善一氏(趣味家)

〔中見出〕「酒はどんな盃が飲みよいか」「どんな盃をつかうか」「盃の美しさについて」「將來の盃はどうなるか」「酒のいれものについて」

〔編 注〕「酒器特集(上)」の1篇として発表。出席者名脇に「昭二五年五月十日／於新宿ととやホテル」とある。出席者の写真各1枚、「出席者諸氏寄書」を写真版で掲載。

#### 文士従軍——マレー作戦従軍記

〔初 出〕日本科学技術振興財団テレビ局〔東京12チャンネル〕1966年12月2日放送

〔出席者〕井伏鱒二、堺誠一郎、中島健蔵、三国一郎(聞き手)

〔編 注〕「私の昭和史」として放送。学藝書林版『証言・私の昭和史』第1巻(1969年6月23日)に附された「東京12チャンネル 報道部長 久門郁夫」名義「まえがき」には、「内容は放送の中から、「昭和の証言」として、後世に残したいもの約百八十編余を選び、時代を追って六巻に分けた。／原稿は放送内容から無駄を省きながら、ご本人の談話の調子をいかし、しかも足りない点をおぎなうという、かなり面倒な作業をくり返した。」とある。同「まえがき」によれば、「毎週一回、三十分間、三国一郎氏の司会」で放送されたもの。学藝書林版『証言・私の昭和史』では〈解説〉を2頁置き(152～154頁)、続いて「証言者」として井伏以下3人の履歴と証言内容を掲載している(154～165頁)。その履歴は以下のようにある。「井伏鱒二 明治三一年広島県に生まれる。早大英文科中退、一時日本美校に学び『世紀』『文学界』等同人となり、新興芸術派として出発。受賞は昭和一二年「ジョン万次郎漂流記」で直木賞、昭和三年「漂民宇三郎」で芸術院賞、昭和四一年野間文芸賞、文化勲章受賞。作品に「多甚古村」「本日休診」「貸間あり」その他。／堺誠一郎 明治三八年、長崎に生まれる。早大仏文科を左翼運動のため中退、三好十郎氏らとの親交が始まる。昭和八年中央公論入社、昭和一二～一四年北滿に赴き、昭和一六～一七年マレー、北ボルネオ従軍、昭和一九年再度召集を受け、広東で終戦。世界評論社を経て昭和三〇年日本文芸家協会事務局長。著書「キナバルの民(北ボルネオ紀行)」等。／中島健蔵 明治三六年東京に生まれる。昭和三年東大仏文科卒、昭和九年同講師、戦争中マレーに従軍、

戦後は主として社会評論、文芸評論を執筆、東大で仏文学を担当、現在は日中文化交流協会理事長、著作権協議会議長。著書に『現代作家論』『アンドレ・ジイド』『昭和時代』『自画像』ほか。文中に従軍中の写真3枚、また、末尾に三国一朗文「井伏鱒二氏・中島健蔵氏に会って」を掲載。

- [再 録] ①東京12チャンネル報道部編『証言・私の昭和史』3太平洋戦争前期(學藝書林、1969年8月31日)。②テレビ東京編『証言・私の昭和史』3太平洋戦争前期(旺文社文庫)(旺文社、1984年12月20日)。†④の文庫化。③テレビ東京編『証言・私の昭和史』3太平洋戦争前期(文春文庫)(文藝春秋、1989年4月10日)†文春文庫編集部「編集部注記」(9頁)末尾に「当文春文庫版は、まえがきなどの一部をのぞき、この旺文社文庫版をそのままの形で刊行するものです。」とあるように、②を踏襲。

#### 対談・新春釣談話

[初 出]『新刊ニュース』(東京出版販売株式会社)第113号(第18巻第1号)1月1日号4頁～11頁  
1967年1月1日(1966年12月25日)

[出席者] 井伏鱒二、藤原審爾

[中見出]「勇壮な鮎釣り」「五キロのはた」「むずかしい山女釣り」「魚の釣り方は魚が教えてくれる」

[編 注] 井伏・藤原の写真各1枚、次のような井伏・藤原の略歴を掲載。「井伏鱒二氏略歴 明治31年広島県生まれ。作家。文化勲章受賞。芸術院会員。早大仏文日本美術学校中退。同人誌「世紀」に『山椒魚』、「三田文学」に『鯉』を発表。以後「文芸都市」「作品」「文学界」とつぎつぎに同人誌に参加。昭12年『集金旅行』、13年『ジョン万次郎漂流記』(直木賞)、14年『多甚古村』を発表。主な著書に『本日休診』(読売文学賞)『遙拝隊長』『漂流民字三郎』『取材旅行』『ドリトル先生』『釣師・釣場』『井伏鱒二全集』全12巻、最近作『黒い雨』(野間文芸賞)等がある。」藤原審爾氏略歴 大正10年東京生まれ。岡山育ち。作家。青山学院中退。同人誌「曙」などを発行。外村繁に師事。『罪な女』で直木賞を受賞。主な著書に『秋津温泉』『浮寝』『藤の実の落ちる季節』『魔子』『孤独のために——わが闘病の記録』『赤い殺意』等がある。」本文末尾に「(荻窪・池畔亭にて対談)」とある。『新刊ニュース』は月2回刊行。

[再 録]『週刊新潮』第11巻第33号(1967年1月14日)の「タウン欄」に、「フトン部屋から最上部屋へ」の標題で、井伏発言の一部を再録。

#### ＝座談会＝／魅せられたる富士

[初 出]『潮』(潮出版社)第111号(6月号)158頁～165頁1969年6月1日(5月20日)

[出席者] 井伏鱒二(作家・芸術院会員)、武田泰淳(作家)、外川政雄(富士山研究家)

[中見出]「雲の動きでわかる天気予報」「カラッと晴れたあと危い」「高く見えると崩れる陽気」「変化し飽きない山の色」「どンドン出るアイヌの土器」「自然を荒らしたオネストジョン」「太宰碑の一带を自然公園に」「もしも富士がなかったら」

[編 注] 本文標題脇「日本人の心に生きる富士の秘められた話やその体験的な魅力の数々」。目次標題脇「心のふるさとへの郷愁と尽きぬ思い」。富士の笠雲の様子を描いた「井伏鱒二氏の「ノート」から」と題するスケッチ3枚(計16種の富士の様子を描く)と出席者の写真各1枚を掲載。「富士山研究家」と肩書きのある外川は、一九〇九年山梨県生まれで、井伏が滞在した御坂峠・天下茶屋主人。

#### 日々是好日

[初 出]『山梨日日新聞』第36890号第2部第18面1983年1月3日

[中見出]「旅と釣り 作家は恥ずかしい 井伏」「文学と恋… 佐多稲子さんと… 三浦」「将棋と富士 富士は千変万化の山 井伏/仕事も悠々としたい 三浦」

[出席者] 井伏鱒二、三浦哲郎

[編 注] リード「井伏さんは平凡な日常を大切に温めながら、そこに一種の飄逸(ひょういつ)味を

見いだしてゆく人生の達人である。八十四歳。だが創作欲は少しも衰えず、最近も自伝的長編『荻窪風土記』を出したばかり。代表作『黒い雨』は、被爆者という衝撃的な素材さえ常凡な生活の中で描くという離れ業を見せた作品として、海外でも高い評価を受けている。三浦さんもまた、厳しい運命の故にこそ、人生の日々に温かい目を注ぎ、作家として円熟の境地。騒がしい現代にあって、二人の世界には心和むものがある。」「将棋に興じながら談笑する井伏鱒二氏（左）と三浦哲郎氏」とのキャプション付き写真1枚、「まことによろし」との井伏色紙、「志乃をつれて深川へいった 忍ぶ川より」との三浦色紙各1枚を掲載。写真下に井伏・三浦の略歴が以下のようにある。井伏「1898年（明治31年）広島県生まれ。早大仏文科中退。著書に『ジョン万次郎漂流記』『本日休診』『さざなみ軍記』など。山梨ともなじみが深い。」三浦「1931年（昭和6年）青森県生まれ。早大仏文科卒。著書に『忍ぶ川』『拳銃と十五の短篇』『少年讃歌』など。」なお、掲載面は第1部から通算。

### Ⅲ 訪問記事など

#### 尊魚記(四)——井伏鱒二氏の素顔を偲んで——

〔初 出〕『尊魚』（井伏鱒二文学研究会）第4号8頁～23頁1999年3月10日（印刷日なし）

〔筆 者〕清水凡平

〔中見出〕「承前（1）（2）」「承前（2）」「（一）信州へ」「（二）井伏山荘」「（三）信濃境駅」

〔編 注〕訪問記に談話・書簡などを引用。記事関連の井伏写真12枚を掲載。

#### 尊魚記(五)——井伏鱒二氏の素顔を偲んで——

〔初 出〕『尊魚』（井伏鱒二文学研究会）第5号8頁～27頁2000年3月15日（印刷日なし）

〔筆 者〕清水凡平

〔中見出〕「承前」「（一）八月七日」「（二）八月八日」

〔編 注〕訪問記に談話・書簡などを引用。記事関連の井伏写真9枚を掲載。

### 参考

#### 探訪小説は斯くして書かれた／（6）痲瘋病院を書いた井伏鱒二氏

〔初 出〕『文学時代』（新潮社）第3巻第11号（11月・探訪小説号）12頁1931年11月1日（10月19日）

〔筆記者〕無署名

〔編 注〕同号「探訪小説十篇」欄掲載の「A五號室患者日記」に関わる井伏発言を掲載。

〔再 録〕『井伏鱒二全集』第3巻（筑摩書房、1997年5月20日）「A五号室患者日記」の「解題」に引用。

#### 井伏鱒二の語る／友田恭助

〔初 出〕『北海タイムス』第16857号第11面1938年3月18日

〔筆記者〕無署名

〔編 注〕冒頭に「上海の呉淞クリーク敵前渡河で戦死した友田恭助氏の遺骨は去る十二日原隊に沈黙の凱旋したが、それにつけて學友井伏鱒二氏の思出話——」とあって、井伏談話と見えるが、新全集第6巻収録「雞肋集」35頁19行目から37頁1行目までを引用、前後の行文を改変して、新たな井伏談話と見紛う形で掲載したもの。

#### 観戦記

〔初 出〕『ホープ』（ホープ社）第2巻第10号（10月号）32頁～33頁1947年10月1日（9月25日）

〔筆記者〕清水崑

〔編 注〕「井伏鱒二／上林曉 文人将將」の内。将棋観戦記中に井伏、上林の発言を引用。掲載のカッ

ト・漫画も清水による。なお、井伏「對局者の言葉」、上林曉「對局者の感想」、倉島竹二郎「文人と將棋」を掲載。

#### 私の余技お手並み拝見釣井伏鱒二氏

〔初 出〕『サンデー毎日』別冊新緑傑作（毎日新聞社）1頁（グラビヤ）1949年5月15日（印刷日なし）

〔筆 者〕無署名

〔編 注〕掲載誌の別冊名を表1、4は「新緑傑作」、目次は「新緑傑作集」とする。井伏の談話などはない。溪流釣りをする井伏写真1枚を掲載。

#### 人寸描／芸術院賞をうける井伏鱒二

〔初 出〕『朝日新聞』第25155号第3面1956年2月13日

〔筆 者〕無署名

〔編 注〕「人寸描」欄。井伏写真1枚を掲載。末尾に「(作家)」とある。談話等の直接の引用はない。以下全文。「五十八歳の誕生日を前に、井伏鱒二氏の芸術院賞が決った。作品は「漂民字三郎」ほか。お祝いを言うと、この人は「ありがとう」とおだやかに返礼する。／けれども円満になったという評判と、気むずかしくなったという世評が、この人には同時に注がれている。矛盾ではない。表面極めておだやかで、底にいいよ激しいものを沈めている。自信というものだろうか。山本健吉氏の祝賀会で、「私のようにマンネリズムな作品ばかり書いていると、批評家の言葉がこわくてこわくて……」。列席者は顔を見合せて、うそつきだよ井伏さんは！ ひでえうそつきだよ、と笑う。そのくせ人びとはこの人の仮面を愛し、尊敬してしまう。／広島県に生れ、瀬戸の海に親しんで育った。作品には、その地方の風がよくみかんの花のようににっている。早大と日本美術学校と両方に籍を置いて、どちらも中退。初期にはナンセンス文学などというレッテルもはられたが、実は極めて渋い。庶民の哀しみの底に、小さなランプの灯をともしといった作風。代表作は「ジョン萬次郎漂流記」（直木賞）「多甚古村」「本日休診」（読売文学賞）「遙拝隊長」等々。短編の佳品は数多く、随筆は滋味あふれる。／少し皮肉で、少し孤独で、そして高いユーモアがあって——処女作に現れた「山椒魚」とひどく似ている。が、サンショウウオは岩間から広い谷川をのぞいてすすり泣くが、この人は自分のすみ家を愛している。たとえ少しはさびしくとも、好きな酒と釣があるから。——／ユーモアはあっても知的に高いから、新聞小説などは不得手。人間凝視の眼はするどくとがれているから、表面的な表情のあたたかさに甘えたりすると、太宰治のような悲劇も起こりかねない。」

#### 井伏鱒二の『本日ゼロ匹』

〔初 出〕『週刊新潮』（新潮社）第3巻第20号15頁1958年5月19日

〔筆 者〕無署名

〔編 注〕「タウン」欄の内。「過日“文壇王将戦”と銘打って行われた文壇将棋戦」では階級の名称を変更し、「昔のAクラス、いまの飛将組で見事一等の栄冠を戦いとったのが井伏鱒二大人。まず大坪砂男を鎧袖一触、つづいて画家の富水謙太郎と今井達夫を破り、これも三戦三勝し中野実と決勝戦をやってこれも軽く（？）一しゅう。」と紹介。「「どうも毎年賞品をもらうために来るようで、これからは文壇将棋には出ないようにしようかと思えますよ」と得意満面。大ニニコで一等の賞品——綿代、仕立代つきの座ぶとん布地をかかえて引揚げていった。」と記す。標題は、「後日譚としては、一等賞を得て、早速座ぶとんに仕立ててエツに入った井伏大人、気をよくして、その二、三日あと、勝ちにまかせてさらに大収穫をあげんと、多摩川へハヤ釣りに出かけたところ、一日かかって一匹も釣れず——というシケ方だったが、この方はいまのところ秘密になっているらしい。」とのことによる。「飛将組で優勝の井伏氏（文芸春秋提供）」とのキャプション付き写真1枚を掲載。



#### ユーモラスな井伏氏の新居

〔初 出〕『週刊新潮』（新潮社）第4巻第26号15頁1959年6月29日

〔筆 者〕無署名

〔編 注〕「タウン」欄の内。新築中の井伏家について紹介し、井伏発言も引用。「その新宅は、氏らしい発想が各所にある。例えば、その一つにこの家を見ると柱が多いのにおどろく。それは、何よりも地震に弱い井伏先生が、第二の関東大震災があっても我が身だけはという切なる願い（？）をこめて考案したもの。その中の大黒柱を命名して「思案柱」と言うそうだ。「何を思案されるのですか？」という質問に間髪を入れず先生いわく、「税金のことですよ、税金の。柱にもたれて税金対策を考えるばかりです」とは、井伏式ユーモアを遺憾なく発揮している。」「新築中の井伏氏（円内）邸」とのキャプション付き写真1枚を掲載。

#### 釣り師井伏鱒二の面目／「大戦果」もタネをあかせば

〔初 出〕『週刊新潮』（新潮社）第5巻第28号15頁1960年7月18日

〔筆 者〕無署名

〔編 注〕「タウン」欄の内。「さる日、鬼怒川から、バスにゆられて三時間ほどの山中に釣りに出かけた井伏氏、二四鯉と三三鯉のイワナの大物二尾を釣りあげた」ことに関わる顛末を以下のように紹介。「この大魚をさげて帰京した。早速、銀座の京料理の主人に腕をふるわせて、河上徹太郎、吉田健一氏らを招待、その戦果のほどを披露したものである。——ここまではいいのだが、魚を一口ほおばった吉田氏「あれっ？ これヒメマスの味がする」といい出した。ヒメマスなら、三三鯉あっても不思議ではない。しかも、魚体に紅の線が一本はしっていたところから、ヒメマスの疑い濃厚とあって、たちまち座はざわめいてしまった。井伏先生の「権威」失墜かと思われたが、先生少しもあわてず、イワナとヒメマスは混血することがある。これはそのあいの子でイワナであることはまちがいないという説を出して、やっと落ち着いたという。」釣りをする井伏写真1枚を掲載。

#### 私の定宿井伏鱒二下部・温泉源泉館

〔初 出〕『中央公論』（中央公論社）第81年第8号（8月号）グラビア1966年8月1日（印刷日なし）

〔筆 者〕無署名

〔編 注〕「私の定宿」欄。下部温泉を訪ねる井伏写真5枚（「撮影 本誌 増田武久」とある）に、断片的な井伏発言を引用。288頁には井伏文「下部の湯元」を掲載。

#### 「地震恐怖症」町のチャンピオン——自他ともに許す井伏鱒二氏——

〔初 出〕『週刊新潮』（新潮社）第11巻第38号19頁1966年9月24日

〔筆 者〕無署名

〔編 注〕「タウン」欄の内。「松代地震の恐怖はいつ消えるとも知れないが、ここに「地震恐怖症のチャンピオン」と自他ともに許しているのが、『新潮』連載の『黒い雨』で原擾の恐怖を描いた井伏鱒二氏。」として、「地震がちょっとでも大きそうだと、井伏氏はタバコを持って表に飛び出す。「昔のサムライなら刀というところだろうが、タバコ好きのぼくはバット（といっても、これは井伏氏が昔、バットを愛好していたためで、タバコのこと）を持って飛び出す」と紹介、「つい最近まで、その井伏氏と張り合うお向いのご老人があったそうで、ひと揺れ、バットと飛び出した表の路地でハチ合わせ、「やあやあ」ということになっていたが、そのご老人、お年のせいかな、近ごろ、揺れても飛び出さなくなった。／「飛び出すのは井伏さんに任す、というんだなあ。いまは、ぼく一人。この界わいのチャンピオンになったみたいだね」と井伏発言を引用。井伏写真1枚を掲載。

#### フトン部屋から最上部屋へ

〔初 出〕『週刊新潮』（新潮社）第12巻第2号17頁1967年1月14日

〔筆 者〕無署名

〔編 注〕「タウン」欄の内。「由来、釣姿をしていると、旅館などでは優遇されないという井伏鱒二

氏が、ふとしたことで、大いにモテた珍談がある（『新刊ニュース』）。として、以下を引用。「旅館へ行っても、釣姿をしていれば、いちばん悪い部屋へ入るでしょう。ある宿へ行って泊まったんですよ。その宿は、武者小路実篤さんがときどき泊まっていたんですが、風サイを見てか、ぼくはフトン部屋のほうへ入れられたんですよ。宿帳へ文筆業って書いたところが、女中さんがね、この間、武者小路先生がいらして、文筆業とお書きになったというんだ。武者さんなら、おれは知っているよっていったらね、宿帳持っておばあさんが来てね。どうぞこちらへって、いちばんいい部屋へ連れていかれた。トラの威を借りたの。あくる日は、そのおばあさんが来て、今日は餌釣りですか、友釣りですかって聞くんですよ。餌釣りだっていったら、冷蔵庫からアジの生身を出してきましたよ。友釣りもするかもわからなくていったら、すぐ番頭がついて来て、オトリを世話してくれた。そんなに待遇が違いましたよ。武者さんのおかげで……」。『新刊ニュース』（第113号1967年1月1日）掲載の藤原審爾との対談「新春釣談話」からの引用。

著者と語る／『全集』が刊行されている／井伏鱒二さん／ユーモアの底にきびしい目

〔初 出〕『赤旗』第8484号第9面1974年4月15日

〔筆 者〕竹本記者

〔編 注〕「著者と語る」欄。「井伏鱒二全集が十年ぶりで刊行された機会に著者をおたずねしました。」と始まる訪問記事で、もっぱら「黒い雨」にまつわる話題などを中心に記者のことで構成。井伏発言の直接の引用は、「ご自分の作品のあれこれを振り返ってみてどうですかと聞くと、恥ずかしいものもあると謙虚にいわれました。／「空想で書いたものがあるが、それをいま読み返してみても恥ずかしい。空想でなく、あったことを書いたものはまあまあだが……」／書きすぎた。身過ぎ世過ぎでたくさん書きすぎた、ともいわれました。」などわずかにとどまる。「書きすぎた、見過ぎ世過ぎでたくさん書き過ぎた……」とキャプションのある、田村茂撮影写真1枚を掲載。

井伏家の「ノーベル賞の憂鬱」

〔初 出〕『週刊新潮』（新潮社）第27巻第43号25頁1982年10月28日

〔筆 者〕無署名

〔編 注〕「タウン」欄。井伏の直接の発言の引用などはない。今年は井伏が「ノーベル文学賞の最有力候補だ」という情報が早々と流れた」ことに関する取材騒動を記す。「こうした騒ぎに当惑顔で、「困ったねえ」を連発。ある木曜日などは待ち伏せた記者連をまくため、どこかでしこたま聞こし召して深夜ご帰館になったとか。」と記し、「先生は、はにかみの人ですからねえ。最初のころは、”そんなもの、くれりゃしないよ。困るよ、困るよ”と、憂鬱げにおっしゃっていたんですが、今では、仮にノーベル賞ということになったとしても”何が何でも辞退する”とガンコに頑張っておられましてね…」という「さる編集者」の言を伝える。「困ったねえ」と井伏先生」とのキャプション付き写真1枚を掲載。

「森繁なら」でドラマになる名作『黒い雨』

〔初 出〕『週刊新潮』（新潮社）第28巻第34号17頁1983年8月28日

〔筆 者〕無署名

〔編 注〕「タウン」欄。「黒い雨」が日本テレビで2時間ドラマになり、8月20日に放送されるという話題を取り上げる。上掲記事中に、「正直なところ、どこからも話がなかったんだ。今回、森繁がするということで、大丈夫だと思って承諾した。彼なら朗読するだけでもいいと思っていた」との井伏発言を引用。

名作再訪／井伏鱒二著／黒い雨／悲慘な核兵器時代の黙示録／いま原爆ドームビル街に埋まり

〔初 出〕『中日新聞』第16211号第7面1987年8月4日

〔筆 者〕石田健夫記者

〔編 注〕『東京新聞』夕刊第8692号1966年9月10日掲載「土曜訪問／”空想では及ばぬことばかり／

できるだけ事実を記録した」／原爆小説を描いた井伏鱒二氏の井伏談話から以下の2箇所を引用。「広島に原爆が投下されたということは、花園に土足で踏み込まれたようなものでしょう。あの作品ではぼくが考えたのは、記録を書くということだったが、その花園と土足の対照は表現したいと思っていた」「たくさんの記録を集め、いろんな人の体験を聞き、主観を抑えて、実際にあったことを記録しようと努めた。なにしろ、空想では考えられないようなことが起こったんだから……」但し、1966年9月10日掲載分とは微細な表現に異同がある。なお、同日発行『東京新聞』第16188号第9面にも掲載。

〔名誉都民顕彰式謝辞〕

〔初 出〕『東京新聞』第17317号第25面〔東京版〕1990年10月2日

〔筆 者〕無署名

〔編 注〕名誉都民顕彰記事「名誉都民顕彰式／文学通じ感動与える井伏さん／福祉に先駆的役割を中城さん／鈴木知事が功績たたえる」の内。リードには「都民の日の一日、名誉都民の顕彰式と功労者表彰式が、上野の東京文化会館で行われた。」とある。「のどを痛めているという井伏さんに付き添った長男の佳介さんが代読をし「十九歳の時に東京に出て来てから七十有余年。東京には極めて愛着を感じています。名誉都民として顕彰いただき光栄に存じております」と謝辞を述べた。」とある。なお、名誉都民の内定は『東京新聞』第17278号1990年8月23日掲載記事「●名誉都民に井伏氏と中城さん」に、「東京都名誉都民選考委員会（座長・山本正淑日本赤十字社長）は二十二日、平成二年度の名誉都民に作家の井伏鱒二さん（<sup>ハニ</sup>）＝杉並区清水一ノ七ノ一、本名・満寿二＝と社会福祉法人多摩同胞会理事長の中城イマさん（<sup>ハス</sup>）＝府中市武蔵台一ノ一〇ノ二＝の二人を内定した。／九月定例都議会の同意を得て十月一日の「都民の日」に顕彰する。」とあるように、8月22日に内定。なお、『広報東京都』1990年10月1日発行第518号第4面には「お二人に名誉都民の称号を贈ります」という記事を掲載。

\*\*\*\*\*訂正〔再掲〕\*\*\*\*\*

新作文藝創作／合評座談會【一】～【四】

〔初 出〕『徳島毎日新聞』第11763号第5面1934年2月6日、第11764号第5面2月7日、第11765号第8面2月8日、第11766号第8面2月9日

〔出席者〕井伏鱒二、逸見廣、酒井眞人、保高德藏、本社東京支局記者

〔見 出〕「石濱金作氏の作品に就いて」「『中央公論』『文藝』『新潮』の懸賞入選作に就いて」「新人作家の擡頭」〔以上第1回〕「中谷孝雄の『三十歳』（改造）」「直木三十五の『私』（文藝二月號）」〔以上第2回〕「堀辰雄の作風」「期待される石坂洋次郎」「横光利一の紋章改造一、二月號」「中島直人のワイアワ驛（文學界二月號）」〔以上第3回〕「残される者（文藝首都二月號）柴田賢次郎」「子を賣つた男の手紙（文藝首都二月號）原二郎」「兄の死と清太郎（文藝首都二月號）園田太郎吉」〔以上第4回〕

〔編 注〕『信濃毎日新聞』1934年2月3日～7日掲載「新春文藝／創作合評座談會」（一）～（五）と同一。但し、中見出の表現に多少の異同がある。

作家を訪ねて 井伏鱒二氏

〔初 出〕『新刊ニュース』目録版（東京出版販売）第4巻第36号（12月号）23頁1953年12月20日（12月15日印刷）

〔筆 者〕無署名

〔編 注〕書齋での井伏写真1枚を掲載。井伏談話の直接の引用はない。掲載誌の『新刊ニュース』は月3回発行、但し、その内の〔目録版〕は月1回20日発行。

## 録音の日に

- [初 出] 『朝日ソノラマ』(朝日ソノプレス社〔朝日新聞社発売〕)第20号(8月号)9頁1961年7月21日(印刷日なし)
- [筆 者] 伴俊彦
- [編 注] 井伏発言を引用。本号には「山椒魚」「屋根の上のサワン」の自作朗読ソノ・シートを附す。表紙にはLP33回転とある。8頁には、「自作朗読 8」の連載欄名、その下に手書きで「「山椒魚」より 井伏鱒二」とあって、井伏文「「山椒魚」について」とマイクを前にした井伏写真1枚を掲載、また、9頁には書斎での井伏写真と本記事「録音の日に」を掲載。
- [再 録] 『現代作家自作朗読集』(朝日ソノラマ)1966年11月25日。†再録本文には筆者名はなく、末尾に「昭和三十六年五月、東京荻窪の自宅にて録音・写真撮影＝笹本常子」とある。

## もう一度お会いしたかった

- [初 出] 『山梨日日新聞』第29606号第5面1962年10月5日
- [筆記者] 無署名
- [編 注] 談話。本文末尾に「談」とある。飯田蛇笏追悼「蛇笏先生安らかに」の内。井伏写真1枚を掲載。
- [再 録] ①『雲母』第49巻3・4月号(通巻第550号)(1963年4月1日)†標題脇には「(山梨日日新聞三七、一〇、四)」とある。②『井伏鱒二全集』別巻1(筑摩書房、1999年9月25日)。

## 土曜訪問／「空想では及ばぬことばかり／できるだけ事実を記録した」／原爆小説を書いた井伏鱒二氏

- [初 出] 『東京新聞』夕刊第8692号第8面1966年9月10日
- [筆 者] 石田記者
- [編 注] 「土曜訪問」欄。末尾に「(石田記者)」とある。記者の文に、井伏発言を交えて構成。「書斎で語る井伏鱒二氏＝東京・杉並の自宅で」とのキャプション付き写真1枚を掲載。

## 著者との対話／悲しみの発作に襲われながら／井伏鱒二 記録した広島への怒り

- [初 出] 『週刊サンケイ』(サンケイ新聞出版局)第15巻第51号104頁1966年11月28日
- [聞き手] 中
- [編 注] 一問一答。「本」欄に連載の「著者との対話」として発表。井伏写真1枚、「黒い雨」梗概、「〈著者紹介〉」を附す。本文末尾に「(中)」とある。「著者紹介」には以下のようにある。「明治三十一年、広島県深安郡生まれ。本名は井伏満寿二。最初画家を志望し、日本美術学校に一年間かよった。その後、早大仏文科にはいったが中退。二十六歳で名作「山椒魚」を発表した。昭和十二年「ジョン万次郎漂流記」で第六回直木賞受賞、三十三年には「漂民宇三郎」で芸術院賞を受け、さらにことしは文化勲章と第十九回野間文芸賞を受賞した。詩、釣り、酒を無類に愛する。／「寛大と辛らつと両面がふしぎに調和した人物」(滝井孝作)「いなか生まれの都会人」(青柳瑞穂)／冷厳なりアリストの目を持っている。」

## 井伏鱒二氏の話

- [初 出] 『サンケイ』〔産業経済新聞〕第13728号第19面1980年10月21日
- [記 者] 無署名
- [編 注] 談話筆記。「原爆小説『黒い雨』のモデル／重松 静馬<sup>さん</sup>死去」中に掲載。重松氏は10月19日午後9時20分自宅で死去。本誌第10号掲載「井伏鱒二談話・座談目録稿——調査現況報告——」には、松本武夫「井伏鱒二略年譜(昭和十六年～平成八年)」(『立正大学文学部研究紀要』第13号、1997年3月15日)165頁の「重松静馬追悼のコメントがサンケイ新聞(二十一日)に掲載される。」との記述を根拠に掲出し、加えて、神戸市立中央図書館など所蔵の大阪本社版第14版に井伏のコメントがないことを報告した。今回、国立国会図書館蔵『サンケイ』〔産業経済新聞〕東京本社第15版への掲載を確認したので改めて掲出する。以下、井伏談話。「一昨年の冬に岡山で会ったのが最後だった。重松さんは原爆症だから、とな

にかにつけて身体に注意していたが、昨年から入、退院していたようだ。偶然知り合った人だが、友人としてずっと付き合ってきた。『黒い雨』のときは、単なるモデルというだけでなく、資料を一生懸命集めてくれた。だんだん知った人がいなくなるのでさびしさを感じている。生きているのが悪いような気もしている」。なお、掲載紙の題号は第1面の題号欄に横書きで「サンケイ」、題号下に「産業経済新聞」、その下に「(産経新聞)」とある。

ノーベル文学賞——この秋突然、候補にあがって／井伏鱒二さん84歳の戸惑い

〔初 出〕『タ刊フジ』第4210号第1面1982年10月10日(10月9日発行)

〔筆 者〕矢ヶ崎誠治記者

〔編 注〕記事中に一問一答を掲載。「井上靖・日本ペンクラブ会長が推薦?／スウェーデンからは投票権持有力者も打診の来日」という中見出を立て、そこではノーベル文学賞の動向について解説記事を掲載。記事全体のリード「文壇の大御所といわれる井伏鱒二さん(〆〆)が今年度のノーベル文学賞候補として名が浮かんでいる。ちょうど去年の今頃「井上靖氏受賞説」が流れてカラ騒ぎに終わったあとだけに「アレッ、井上さんじゃないの?」という感じだが、井伏さんには広島被爆者を扱った『黒い雨』の英訳もあって、文壇消息筋の話だと、すでに井伏さんの名はスウェーデン王立アカデミーに推薦済みだという。もっともこれには、何とも生臭いウラがあるんだ、とも伝えられている。だが、清流のアユのごとき井伏さんご当人は、身辺にわかに騒がしくなりそうな気配にただブ然。「いらないよ、そんなの」「困ったねえ」を連発するのである。」次のような導入から一問一答を掲載。「井伏さんは、今様に言えばシャイな人である。マスコミがインタビューを、と申し入れても、まず受けて貰えない。写真撮影となると、いよいよもって拒否なさる。東京・荻窪の宅に親しい人以外は寄せつけず、悠々自適の姿は、さながら、『山椒魚』の孤高にも似ているのだが、この日(七日)は一週間ほど前に発病した軽いメニエル氏病の具合がよかったのかも知れない。血色もよく、浴衣の上に丹前をはおり、先客の作家三浦哲郎さんと談笑中だった。単刀直入、ズバリたずねてみた。」なお、他に「被爆扱った『黒い雨』英訳が対象」、「知らないよ」「弱ったねえ」「くれっこないよ」との見出があり、「ボクなんかにくれっこないのに、困ったねえ」と吹き込んできた世俗の嵐にとまどう井伏さん(荻窪の自宅で)」とのキャプション付き写真1枚を掲載。

#### 陶芸との出会い

〔初 出〕『月刊カドカワ』(角川書店)第2巻第2号(2月号)6頁～7頁1984年2月1日(印刷日なし)

〔筆記者〕無署名

〔編 注〕あるいは談話筆記か。「井伏鱒二(作家)」の見出を附して掲載。井伏写真1枚を掲載。

〔再 録〕『井伏鱒二全集』別巻1(筑摩書房、1999年9月25日)

#### 特別インタビュー／「黒い雨」あとさき

〔初 出〕『すばる』(集英社)第11巻第8号(8月号)118頁～127頁1989年8月1日(印刷日なし)

〔聞き手〕新井満

〔中見出〕「小説『黒い雨』の自己評価」「捨てられていた矢須子のカルテ」「『山椒魚』と『黒い雨』と『ドリトル先生』」「友人たちの死」

〔編 注〕リード「映画『黒い雨』(今村昌平監督)が評判になった。カンヌ映画祭のグランプリは惜しくも逸したものの内外に与えた衝撃は小さくなかった。広島にその黒い雨が降って二〇年経った昭和四〇年、小説『黒い雨』(発表当時は「姪の結婚」)は書かれた。そして再び二〇年余、井伏鱒二はいま何を思い、どう生きているのか。九一歳の高齢にもかかわらずお元気な老大家在荻窪を訪ねた。」本文末尾「(一九八九年六月七日、杉並の井伏邸にて／写真／栗原克己)」。インタビュー中の写真3枚を掲載。

〔再 録〕①『足し算の時代 引き算の思想』(新井満対談集)(PHP研究所、1990年8月3日)[生きとし生ける者へのまなざし] †中扉裏に井伏略歴、井伏との対談の前に新井「対談の前に

——日本のドリトル先生」を掲載。初出のリードは削除。②『足し算の時代 引き算の思想』(新井満対談集・PHP文庫)(PHP研究所、1993年5月20日)†④の文庫化。③『井伏鱒二対談選』(講談社文芸文庫)(講談社、2000年4月10日)[生きとし生ける者へのまなざし]

空を飛んだことがある。

[初 出] エアーニッポン機内誌私の青空aozora (エアーニッポン株式会社) 創刊号5頁1990年7月1日(印刷日なし)

[筆者] 萩原得司

[編 注] 談話筆記。本文末尾「(聞き書き・萩原得司)」。

井伏談話は目次横(本文としては3頁目。共紙の表紙から数えて5頁目)に掲載。井伏略歴は以下のようにある。「●1898年(明治31年)広島県生まれ。「山椒魚」「鯉」などで文壇に早くから認められ、「ジョン万次郎漂流記」で直木賞を受賞。とくに「黒い雨」「荻窪風土記」は世評高い作品。1966年(昭和41)年には文化勲章を受賞している。」目次頁掲載の刊記にある本誌の標題は「私の青空」とのみある。表紙には「エアーニッポン機内誌私の青空aozora」とある。なお、表紙左下に「ご自由に／おもち帰りください。」とあるように、掲載誌の「私の青空」はANK(エアーニッポン株式会社)の機内搭載誌で、現在は『青空キャンパス』と名称変更。

[再 録] 萩原得司『井伏鱒二聞き書き』(青弓社、1994年4月1日)